

日本で浸透加速

リジェネラティブ農業の環境性・収益性を追求

バイエルクロップサイエンス(東京都千代田区)

は、日本で「リジェネラティブ農業」を押し進める。リジェネラティブ農業は土壌の健全性を改善することを中心に据え、その回復力の強化を目指した成果ベースの生産モデルを指す。このほど都

内で行った事業戦略発表会で大島美紀社長は「より良い収穫、さらには環境再生を実現するわれわれのイノベーションで気候変動に対応し、新たな収益性強化の道筋を示す」と強

事業戦略を説明する大島社長



バイエルクロップサイエンス(東京都千代田区) 大島美紀社長

調した。日本のほ場条件に合った統合的アプローチにより、リジェネラティブ農業の浸透を加速させる考えだ。

リジェネラティブ農業では、農家の収益性向上と環境負荷低減を同時に実現させる。同社はすでに高濃度製剤、ドローン散布、ほ場に合った除草剤を適切な量・タイミングで散布できるデジタルツール「水田雑草テラミーイド防除」、営農情報

のデータ化、衛星・気象データ連携といった各種ソリューションを投入済み。これらの組み合わせで農家の所得向上、収穫量アップ、作物品質の向上、コスト削減、省力化、薬量削減、温室効果ガス(GHG)削減などを実現させてきた。

目指しながら、収量を増やす柔軟な生産モデルを提供可能という。

さらに、リジェネラティブ農業強化の一環として、総合クラウドソリューション企業との協業を決めた。水田雑草テラミーイド防除の導入におけるカーボンフットプリント(CFP)を算定

し、GHG削減効果を可視化できるソリューションの提供が可能になる。今後、生産者や流通関係者などと協力してGHG削減に取り組んでいく。

「水田雑草テラミーイド防除」は、水田雑草テラミーイド防除だ。数値化されたデータ分析により数年かけてほ場の雑草密度を減少させ、結果として薬量、散布回数、コストを抑えた防除体系を組むことを目指す(大島社長)。

の普及加速における軸は、水田雑草テラミーイド防除だ。数値化されたデータ分析により数年かけてほ場の雑草密度を減少させ、結果として薬量、散布回数、コストを抑えた防除体系を組むことを目指す(大島社長)。